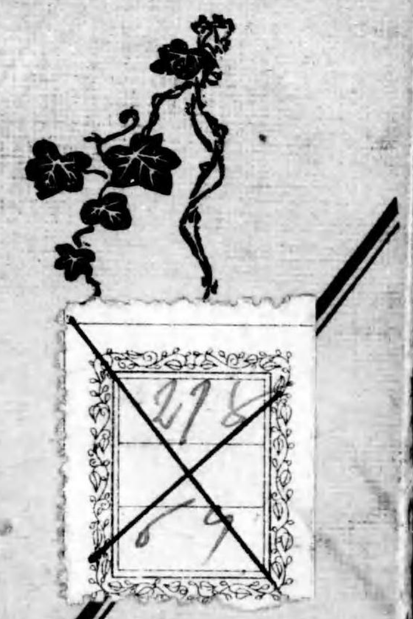
特100
874

傑作叢書

理想の良人

オスカア.ワイルド作



始

特100
874,

傑作叢書第十一編

理想の良人

オスカア、ワイルド作

大正
3. 12. 3
内交

〔序にかへて〕

オスカア、フインガル、オフラハアチイ、ワイルスト、ワイルドは、千八百五十四年十月十六日、愛蘭のダブリン市北區メエリオン、スクエア一番に孤々の聲を上げた。彼は、サア・ウ井リアム、ロバアト、ワイルド子爵の第二男であつた。父の子爵は名高い外科醫で、特に、愛蘭古文書院の院長と、國務調香委員會の委員長として名高かつた。が、子爵は七十七歳の春逝つた。

ワイルドの母は、其名、セエエン、フランチェスカと言つて、副監督牧師エルギイの女であつた。母は其雅號を、「スペランザレ」又は「ジョン、フエンショオ、エルス」と言つて、閨秀文學者としては、可成に名聲を博して居た。

ワイルドは、イイトンのロイヤル、スクウルや、ダブリンのトリニチイ、カレチヂを經て、然る後、オクスフオドに入學した。そして一九七八年に芽出度く學位を得て出た。

彼のオクスフドに於ける生活は、極めて贅澤なものであつた。その放肆も、

智識と美とに對する熱情は、自由生活に對する大膽な躰度に調和して、茲に強烈な熱狂的動作となつて生れて來た。といふのは、當時英國藝壇の異彩として噴々の批評を一身に擔つて居たあのラスキン、ロセッチ、ウィリアム、モオリス、パアン、ジョオンス等の主宰する唯美主義の勤動に加はつた事だ。彼は、自ら之を統轄しようとする野心を有して居たのだ。

一八七六年には、彼は、ギリシヤ、パレスタイン、イタリイ地方に旅行を企つた。そして七八年に至つてオクスフォードにて、詩「ラヴェンナ」に對しニウジゲエト賞金を得、八一年には「オスカア、ワイルド詩」と題する詩集を公けにした。當時は兎角の非難もないでもなかつが、併し其特色ある唯美派……諄美派の青年詩人として知られるのに充分なる機會であつた。けれど同じ唯美派と言ても、ワイルドの傾心する所の唯美的生活は決して、ロセッチや、スインバアンなどの觀察するが如き、官能的肉感的なものではなくして、寧ろ極端に現實を離れた技巧的……遊離的な生活であつた。

彼は、自己の派にいくらか嘲笑諷刺の矢を放つ米國人に對し、直に唯美派の傳播に務めんがため、八二年の春、米國に渡つた。彼は、紐育、ボストン、其他名高い所々へ渡つて、二百數回の巡回講演をやつた。その題目は「英國の文藝復興」であつたが、講演の結果は、あまり良い方でもなかつた。依然として反感と嘲笑が、彼が唱導を迎つた。彼は、二年間の講演旅行を終つて歸つて來ても矢張り耽美な……放縱な……閑雅な……生活に一身を任れて居た。そして輕い一個の色彩の中に、人生の萬象を包み込んで居るのであつた。彼は米國に滯在中、脚本「ヴェラア」を書いた。彼は歸國後「ハツブイ、プリンス、エンド、アザアーテュルス」や「ロオド、アアサア、セビルス、クリイム、エンドストリイス」を初めとして彼の有名な「ピクチュア、チプ、ドリアングレイ遊蕩兒」などを公にした。そして一八九一年稀代の名論集「インテンション」を公にし、彼の名聲は漸く世界に湧いて來た。然し彼が脚本家として一代の芳々九轟かしたのは、一八九四年に出版せし「ウインダマルス夫人の扇」に依つて

である。之れについで「ウーマン、チプ、ノウ、イムポータンス」其次は一八九五年上掲の「アイテアル、ハスバント」である。然して一八九二年の偉作、彼の「サロメ」を公にした。彼の名聞は、之に至つて一代を壓する觀があつたが、一八九五年の三月、彼のためには悲極の刑が降つた。クインスベリイ侯爵に對しての不遜の行爲からして、罪を得た二年間の星霜は、此大鬼才が苦役に親まればならぬ身となつた。彼が入獄してからといふものは、一世の名は一朝の惡罵と化し彼の不朽の作「獄中記」を世に出したのである。

二年間の苦役を終つたワイルドは、日一日と落魄の底に落込んだ。見る影もなき大鬼才の末路は、遣る瀬なき捨小舟となつて、遂に創作の力も消え、思索の元氣もなく、哀れ一九〇〇年の寂びしい一夜、パリイの冤窟の一隅に、末路の名殘りも便るに人なく、友なく、憔悴と悲慘の底を叩いて死についた……。世には彼の晩年程寂みしい……悲運の……奈落を覗いた作者は。亦もないであろう……

大正三年十一月二日

紫鏡識す

理想の良人

チスカア、ワイルド作
久保田紫鏡
中村梨村共譯

『壹』

倫敦のハイド、パークに程近き、グロベナア園にある外務次官、サア、ロバアト、チルターン家には、今宵夜會が開かれた。

招かれた客は……どし〳〵やつて來た。あの數寄な二階の八角室も、もう今は來客で孕されて居る。が、有繋は、部屋の數寄に連れて、その集り來る連中も上流の數寄屋ばかりである。

部屋は、眩ゆい程に煌いて居て、階段の頂きには、當家の夫人、ゲルトウド

チルターンが立つて客を迎つて居る。夫人は、グリーキ式の美を具へた落附のある立派な女であつて、もう年の頃は、二十六七である。

階段の上の天井からは、蠟燭の火に賑はふ吊飾燈が吊つて、それが階段の壁に掛かる十八世記時代のフランス綴織を照らして居る——これにはプシエ派の「愛の捷利」の圖が描かれて居る。右手の方は音樂堂へ導く扉口で、ゆるやかな弦樂四部合奏の律調が流れるが如く、洩れてくる。左側の扉は……應接室へも通じて居て、マーチモント夫人もベツルドン夫人もルイ十六世記の寢椅子に腰をかけて、何をか語り合つて居る。二人共に、美しく着裝つて居て、實際「華者の權化でも形容したい位だ。そしてその所作の華美さが一種美妙な魔力を有して居る……。まあワツトオの筆になつたとも言へやう……。

「今晩は、ハアト、ロツク家へいらつしやるの……？」と、マ夫人は問ふた。

「多分、行くでせう……。が、貴女は……」

「ええ……私も。でも退屈な會ぢやありせんか……？」

べ夫人は問ひ返した。

「本當に爾うですわね。何しに行くのか、解りやしない……。」

「私は、物を教はりに、此處へ來るのですよ。」

「まあ、私……亦、物を教はるなんて大嫌ひですの！」

「私だつて爾うなんですわ。何だか、町人社會と同じ程度に、落ちたやうでれえ……。でも、ヂルトウドさんは「日常、私に、眞摯な人生の目的を持たなければ厭けないもの言ふのよ、だから、一つ、それを見付けやうと思つて此處へ來たのですわ……。」と笑ひながら言つた。その時、ベヂルド夫人は、劇場用の拇附目鏡を出して四邊を見廻した。そして、

「でも貴女……今晩の會は其麼、目的の人さへ、居ないぢやありませんか、。私をヂンナアへ連れて行つた人なんかも、自分の奥樣の事ばかり話して居て、」

……」

「まあ……好かない事れ……」

「本當に爾うですわ……。あなたのお連れのお方は、何を話したの？」

「私の事を……。」

「では、面白かつたでせう……？」とベジルドン夫人は、ものうげに言つた。

「面白い事があるものですか……。」とアアチモト夫人は首を振つた。

「何もいふ詰らない役割でせう……私達は……」

「それが亦、私達に似合つて居るのですよ！」

二人は起つて音樂堂へ行きかけた。その時、ネクタイも英國狂さて、有名なあの大使館附の若い隨行員――子爵ナンジヤツクが、叮嚀に禮をして近寄つて來た。子爵は、靜かに話しかけた。

下男頭のメエゾンは、階段の項に立つて、來客の名を叫び上げた。

「バラフオルド樣――ジエン、バルフオルド夫人。……ケバアントム樣。」

呼ばれて伯爵ロオド、ケバアンヤムが這入つて來た。伯爵は、もう七十歳の老紳士で、ガアタアの星章と、暑章をつけて居る。何う視てもロオレンスの肖像畫でも見るやうな絶好のポオツク黨型をして居る。伯爵は……叮嚀に

「やあ今晩は……。チルタアン樣……。手前の方の、のらくら者は、未だ集つて居りませんか……？」と戯らけるやうに言つた。夫人は莞爾りとした。

「ゴオリング樣は、まだいらしやいませんのでせう……」

その時、マベル、ヂルタンが、出て來た。マベルチルタは、此家の主人ロバアト、チルタンの姉であるのだ。マベルは伯爵の傍へ近つた。

「何故……貴方は、ゴオリング樣を、のらくら者だと仰有いますの……？」

と言つて咎める如くしだ。マベルは、實際、純英國風の美型林檎の花のやうに美しい女である。彼女は、花の香と、花の自由とをすべて具つて居る。彼女の髮には、黃金散る縺が、きらきらときらめいて、唇の綻び染めた風情は幼けない兒供のうに、何ものかを豫期して居る。彼女は人をチヤームするやうな青春しい放縱と、無邪氣から來る驚くべき勇氣とを具へて居るが、通常な人間の眼には、彼女は在程、藝術品を想起させるやうな事はない。然しその實は實に、タネグラ彫像のやうなのである。さて、伯爵は爾う言はれてから答へた

「それは何もせずに、暮して居るからです。」

「其麼事はあるものですか……。だつて朝は十時に公園へ馬車でいらつしやるでせう。一週間に、三度は屹度オペラへ行つて少なくとも一時に五度は着物を着更へて、そして季節の間は、毎晩、外で晩餐を遊ばすやありませんか。それでも何もしないで暮してると仰有るの……？」……と言つた。伯爵は勞るやうな色を浮べて冷こく笑つた。そして「貴女本統に面白いお方だね……」

「何うも難有ふございます。これからは度々いらつして下さいましな。水曜日は何時でも、私達は、宅に居りますれば……」と言つて尙伯の星章をもほめた。

「倫敦の交際社會も全く厭になりました。出入の服屋を紹介するのはまあ兎も角――彼の男はいつでも右黨の政府黨側の味方をするのですから」

「でも私は倫敦の交際社會は好きよ、美しい莫迦か、氣の利いた狂氣計りになつて――交際社會は之れで花がもてるのですもの」と靜に語つた。

「じや、ゴーリングは何れに屬するでせう？」と、伯は半ば眞摯に尋ねた。

「今におわかりですわ。」と恁う孃は言つて一寸頂垂れた。その時、下男の頭メエゾソは亦來客の名を呼び初めた。

「マークビイ夫人。チエベレイ夫人」と灰かつた毛髪を侯爵夫人形に束ねた、親切相な快活なマークビイ夫人は、連れのチエベレイ夫人と一緒に這入つてきたチエベレイ夫人は蒲柳の性といふより却つて病的な軀附で、只灰綠色の眸が不斷に働いてゐる女だ。彼女はヘリオトロープの衣裳にダイアモンドを著けてゐる。マークビイ夫人を牡丹とでもいつたら、チエベレイ夫人は蘭の花とでも言ひたい。彼女はすべての裝において他人の好奇心を咳かすかのようで、又座作進退優美で、余りに多くの流派を意匠した一の藝術品とでも評し得よう。マークビイ夫人はチルタン夫人に向つて丁寧に「今晩は、ゲルトウド樣、イエベレイ夫人を連れないように仰つて下さつて、どうも有難うムんしたわ。這麼に美しいお方同志は御懇意になさる必要がありますわ」

チルターン夫人は微笑を湛へて、チエベレイ夫人の方へ前んだ。そして何だ

か冷かに頭を下げた。彼女は軈かて「チエベレイ夫人には會つて札目にかゝつたように思ひます、私は再婚なさつた事を存じませんでたが」

マークビィ夫人は快活相に「ほゝゝゝ此節は再婚することが流行ではありませんか」と言つてメリイボロー公爵夫人に向き直つた「まあ、奥様公爵様には如何でいらつしやいます、矢張りお腦がお惡るいのですか？——あれ計りは仕方がないのでムいますれ。——家系と云ふものは爭へないものですれえ」

チエベレイ夫人は扇を玩びつゝ「本當にお會ひ申したことがありましたでせうか——隨分永い間英國にはゐませんでしたので」

チルターン夫人は「學校で、御一緒だつたのでしたのでムいませう」

チエベレイ夫人は「つんとすました面色で「什うでムりましたか知ら、學校時代の事だといつたら厭なと思つた微かな記憶があるだけで全く忘れて了つてゐます」

チルターン夫人は冷かに「御無理もムりませんですわ」その時、チエベレイ

夫人は急に愛嬌よくなつた。そして「私し御主人にお會ひ申すのを何よりの樂みにしてゐますわ。外務省にいらつしやるものですから、誰也納でもよく話しが出ました。大陸では人の名義が綴り違いをせずに新聞紙に書かれるようになれば、それも有名なものですが、お宅さんの御名前は爾うですわ……御客様ですわ」

「貴女と良人との間には、余り似合つた所とてもあるやうに思はれません」恁う言つた……。そして、チルターン夫人は彼方へ行つた。と亦横に居た……

ナシヤロク子爵は「まあ珍らしい、伯林以來じやありませんか」恁う話しかけた。

チエベレイ夫人は「伯林以來否え、五年前ですよ。」

「そうでしたかな。兎に角、貴女はまあ益々美しくといふ寸法だね。一体什ういふ風になさるのですか？」

「ほゝゝゝ、それはねえ、貴郎の樣な綺麗な方と許り、お話しすることに決め

てゐますかですわ」

「お世辭には恐れ入ります。茲の言葉を借つて言へば、貴女は私をバターして

ゐます」

「英國では、其麼ことを言ひますの？まあ厭だわ」

「爾うです。不思議な言葉ですが、これは世間に廣く知らせる心要があります

子」と子爵は笑つた。暫くすると、主人の外務次官サー、ロバアト、チルター

ンが見えた。彼は若作りに見えるが、年は四十歳だ。髯はなく輪廓のくつきり

とした顏立である。黑い眼と黑の髮とが殊更ながら人格を顯著にして居る。

が、然し人受けの宜すぎるといふ方でもない。――といふのも人格で、人受

の好いといふのは稀れなことで――。併し小數の人に激賞せられ、多數人から

尊敬を受けるといふのは他と異つた此の人の格位である。尤も自負心も灰の見

えてゐるが、之れは此人が、今迄に收めた成功を意識してゐるといふことが、

誰でも頂點かれる。神經質な氣象も疲れた顏付。きつと彫まれた口も顎とは、

ロマンチック

浪漫的な凹んだ兩眼の表と情著しい對照をなしてゐる。何だか此の兩者の不釣

合が、此人の感情と理智とが距離を有するといふことを示してゐる。借如たら

思索と情緒とが或る激しい意志の力で各者が自己限界に孤立させられてゐるよ

うである。此人の鼻の穴や、血の失せた痩せた手や、其他の點から批評して、此

人を美術的と呼ぶのは妥當な批評ぢやない。美術的といふことは衆議院に捷利

を得る事が不可能からである。然し白耳義のヴアンダイクが畫に欲し相な顏で

ある。

ロバートチルターンは一座を睜つた「そしてよくお出下さいました、マーク

ピイ夫人、サージョンも御一緒でせうね」

マークピイー夫人は「否、え良人などよりはもつと好い方と同伴しましたよ

政治に凝り出してから後は良人も困り物になりました。本當に衆議院も、これ

から役に……といふ樣になつてから反つて、惡くなりましたのね。」

「否、否、甚麼場合だつて我々は公衆の時間を空費するのに、全力を盡してゐ

るようなものでありますよ。が、併し之れはそうとして、好い人とは誰の事です？　誰をお連れ下さつたです？」

「えゝそれは、チエレベイ夫人といふ方ですよ、あのドルセツシアーのチエレベイ家の分家なのでせう。よくは存じませんが――此節は家系など眞にされませぬから」

「チエレベイ夫人⁉聞いたような名ですれ」

「誰也納から見えたばかりなんです」

「あゝあゝ誰の事か分りました！」

「お分りですか、彼の方は彼地は仲々顔の利かれた方で、それは面い白程お友達の疵を知つてゐられますよ。私も此の冬は維也納へ行かればなりませんが、向ふの大使館には好い料理人が居りませうかれ」

「居なくては――若し居なければ大使は呼び戻されなければならぬです。それはそうとそのチエレベイ夫人を紹介して下さいよ」

「お紹介しませう」と言つてマークビイ夫人は、チエレベイ夫人向ひ「ロバアト、ホルターン様が貴女に御昵懇になりたいつて待焦れていらしやるのですよ」

ロバートチルターンは會釋をした「チエレベイ夫人の様な方だつたら誰だつて待焦れます。維也納の隨行員からは貴女の事を宜く手紙に書いて參りますよ」

恁う言つた。チエレベイ夫人は、「どうも有難うムります、ロバアド様、嘘から出た誠といつて、お世辭の交際も軈て本當の交際に決つてなるのですよ、之れに私は奥様を存じてゐます」

「正數に？」とロバアドは笑つた。

「いえさうですよ、今奥様から學校で一緒だつた事を承つたですが、爾う言はれて見ると、奥様が善行賞を授かりになつた事など、よく覺えてゐます、あの方はいつも善行賞を――」

ロバアドは、微笑しながら「では貴女は何を御褒美にお受けなさいました？」

「私の褒美なんかは、卒業後に集りましたのですよ。善行の褒美ではありせぬけど……」

「それだつたら何か綺麗な物の、御褒美なんでせう？」

「女は顔が美しければいつも褒美がありますか知ら。却て罰を受けるのですよ此節の女は褒美の賞め手の實意の爲に年をとるようなものですよ。少くとも倫敦の美しい大部分の御婦人方は、その憔悴た原因を説明するには、恁うした説明で悉くされてゐますわ」

「勿々の恐味のある議論ですね。貴女を組分けにしては失禮に當るかも知れませぬが、然し何うでせう、眞底の處、貴女は樂天家ですか？はた、又、厭世家でいらつしやるですか？これが今日殘されてゐる只二つの流行的の宗教のやうですが……。」

「私しは何れにも屬しませぬわ。樂天は大きな口を開くのが初めで、厭世は青眼鏡に終るのです」

「では自然がいゝと仰るんですね？」

「それや時にはね、之れを續けて往かゝと言ふ時には隨分氣骨の折れる術ひ方ですわ」

「よく耳に入る此頃の心理小説家は、その物説に對して何も答へをするんでせう？」

「女の力は心理で説明しやれないといふ處にあるです。男は解剖されても女は讃美される計りですわ」

「では科學と婦人問題とは没交渉であるいふお考ですね」

「科學は理屈の範圍のものですわ。現世で科學の力が、自己で制限されてゐるのもその原因は之れなんだわ」

「そして貴女方は理屈逃れのものを代表する譯ですね」

「美裝の女は什麼でせう……」

ロバートチヽメーン。叮嚀に頭を下げた「其邊の處に贊成致し兼ねます。で

すがまあ御掛け下さい。そして何故又あの美しい維也納から此の陰氣な倫敦へ入來つたのですか、立入つた問ひですが？」

「立入つた問ひといふものムいません。答の方が時々立入るのでムいますが」

「まあ、何れにしても、政治の事か或は遊山といふ事かで入來したのでせう」

「政治は私にとりて唯つた一つの樂みです。御承知の通り四十や四十五にもならずに浮氣をしたり、すきな眞似をするのは流行らないのですから、三十以下の女や、三十以下だと吹聽してゐます女は、もう政治か慈善といふ方面より外行き場はありませんもの。しかし慈善は惡人であつた人の隱れ家であります。罪惡の葬り場所でありますわ。で私は政治の方を採る譯です。その方が、づゝと意氣でムいます」

「いや政治に捧げた生涯ほど尊いものはないです。然しまた何故不意に倫敦に入來したのですか、倫敦の季節ももう過ぎましたのに……」

「私は倫敦の季節なんか心にはありませんの、たつた貴方にお目にかゝりに

つた計りです。れえ、貴方、女の好奇心といふものを御存知でゐらつしやいませう。男の方よりは強うムいますれ……本當にお目にかゝりたかたですよ。それに是非御願申したい事があるので……」

「それは詰らない事でないとようムんすが、チエベレイ夫人。詰らない事といふものは得て仕て行り難いものですかられ……」

チエベレイ夫人は考へたそして。「否え、そう詰らない事だとも思ひませんが……」

「それならば何ですか……仰つて下さい」

「何れ後程に申上げませう。」と彼女は起き上つた。そして「ですが私はお宅の御美さを拜見致させて貰つてもようムんすか？繪が大層立派だ相でムいますれ

あのアーンハイム男爵か——御存知でせう、よく貴方がコロオの繪畫を持つていらつしやる事を言つてゐられましたつけ」

ロバアトは、ぎよつとして氣色をかへた。「貴女は、アーンハイム男爵を御存

じですか？」

チエベレイ夫人は莞爾とした。「極めて懇意に願つて居りました、貴方は？」

「えゝ一時は？」

「不思議な人では厶りませんか？」

「大變に非凡な色々な方面に力のある人でした。」

「私はアーンハイム男爵が自身で自傳を著されなかつたのを大變に殘念に思ひます。自傳でもあつたら本當に面白かつたでせう」

「彼の人は恰度往古の希臘人の如に、方々の人間や都の事をよく知つてゐました」

「えゝホーマーのペネロープが宮殿で憂目をみるような事もなく……れ……」

妙な處で、チエベレイ夫人はホーマーの叙事詩を籍つて皮肉つてみた。此時下男頭のメーゾンはケバシヤーム伯爵の子息である、ロード、ゴーリンゲを連れて來た。ゴーリゲン子爵は今年三十四歳であるが、自分から若がつてゐる。

育ちが育ちだけに卑しい表情などは少しもない。利口な性質であるが利口なと思はれることを避ける方で、批のない洒落家である。が、浪漫的と思れる事は氣にしてゐるらしい。然し世間と仲の善い人物である。世間から誤解される事が好きで、之れが又却て、有利な地位を彼に與へてゐるのである。ロバアトは子爵を視るや、待焦れた如に「やあアーサー君、チエベレイ夫人、ゴーリンゲ君を御紹介します、倫敦一の怠け者ですからね……」と戯れた。

「私、ゴーリンゲ樣でしたらお初でもムいませんよ」

ロードゴーリンゲは會釋をした「私を御記臆であるとは思がけませんでした」

「私の物覺えはいゝ方なのですよ、それに貴方は未だ獨り身ですか……？」

「そんなものでせう」

「まア、浪漫的なのね」

「なに浪漫的じやありませんよ、まだそんな年ではありませんよ。浪漫は年寄株に讓りませうよ……」と言つた時、ロバアトは横合から。

「チエベレイ夫人。ゴーリング君はブウドル倶樂部の産物ですよ」

「倶樂部の名譽の人ですわ」

「貴女は長く御逗留なさるんですか？」と子爵は忙がしげに尋れた。

「えゝ、それは天氣と料理にも依りますが、一つにはロバート様に依るのです」

「貴女は正歟我々を歐羅巴の戰爭の渦中に投げ込まうとなさるのではありませんれ」とロバアトは何氣なく言つた。

「其麽心配物ではありませんわ。今の所では」と恁う言つて彼女は、嘲るやうな色を眼に浮べた。そして軈がて……チエベレイ夫人は、コーリングは子爵に會釋しながら、ロバートと一緒に出て行つた。ゴーリング子爵はぶらぶら歩いた。そしてロバート、チルターンの令妹アベル、チルターンの方へ行つた。

マベル孃は……「大變遲いわれ」と言つて笑つた。

ロードゴーリングは「淋しかつたですか？」と亦笑つた。

「本當に淋しかつたわ」

「それは惜しい事をした。も少し遲く來たれば宜かつた。私しは淋しがられるのが大好ですから」

「貴方は我儘なのれ、いつも自分の惡い所を計り仰つて……」

「いや私はこでれも自分の惡い所の半分位しかいつてゐませんよ」

「では其の殘りの方は余程いけない事よ……」

「それや全く恐ろしい位ですよ。之れを夜半に思出すと直く蒲團を冠るです」

「まあ好いわ。私は貴女の自分で惡いと仰有る其の性質が好きだれ。その一つだつて失くしては厭よ」

「御親切に有難ふ。貴女は何時も御親切です。それはそうとして、貴女にお聞き申したいが、チエベレイ夫人を、誰れが此處へ連れてきたのです……あのヘリオトロープ色をつけてゐた女……今ロバアト君と一所に出て行つた女……」

「あの方だつたらマークピイ夫人が連れてゐらつしやつたでせう。何故其麽事を聞くの？」

「晝間は才女で、夜見ると全く美人ですよ……ね。何有……何年も逢はないから問ふたのですよ」

「私しはもうちゃんと厭になつたのよ」

「成る程、そこに貴女の感心な趣味があるのですよ」

「英國の若い貴婦人は趣味の全くいゝ守護者ですね」と傍近く寄つた。

そうこうして居ると、ナンヂヤック子爵が突然出てきた。一言二言話して居たが、軈がてアベル嬢と伴に音樂室の方へ去つた。ケバシヤーム伯爵は自分の子息の方へ進み寄つた。

ケバシヤーム伯爵は「これ、お前は此所で何をもてるのじや、亦日毎の如に無駄に日を過して居るの？いゝ加減に寢るがよい。お前は宵張りでいけない。きけば此間の晩なんかラツフオルド夫人の家で朝の四時迄踊つてたと云ふじやないか」

「なあに、その時は四時十五分前までゞすよ」

「お前は倫敦の社交會の有樣が分らないのか、まるで腐敗しきつた祿でもない者計りの集りじやといふ事が解らないのか……」

「いえお父さん、その祿でもない者の話がすきなのですよ。その中に生甲斐のあることを私は自信致します」ところへ美しい眉をあげたベツルドン夫人が顔を出した。

ベツルドン夫人は「まあ貴方がここに！貴方が、此麼政治家の會にいらつしやるとは全く意外ですわ」

ロード、ゴーリングは私は「此麼夜會が大好きです。政治家の夜會で政治談が出ないのが、こゝ丈けですよ」

ベツルドン夫人は「私は政治が大好ですよ。だから、始終やりますのよ。それでも聞くの丈けは御免です。それにしても、れ、氣の毒な議員達はあんな長い討論をよく辛抱してるですね」

「それは鳥渡も聞いてゐないからですよ」

「正歟に？」

「無論そうです、注意して聞くのは危險なもので、耳に這入れば説き伏せられる恐れがあります、説き伏せられて沈點するような男だつたら全く釋の解らぬ男ですから」

「それだからですね。私達に男の方が解らないと同じやうに又女の美點が男の方にお解りにないのよ」

マーチモント夫人は横合から語勢を強めて「男つていふ者は一寸も妾達の値打を視てくれないのですものね。それだから何時でも他の人の處へ往かなけや解らないのよ」と言つた。

ロードゴーリングは莞爾した。そして「ところでそんな御意見が、倫敦中で一番立流な旦那樣方を持つてゐらつしやる方のお嘆きですかられ」

マーチモレント夫人は尙「事實ですね。宅のレジナルド等きてはあらと言つたらこれつばかりもないのですもの本當に辛抱しきれませんわ。面白がると

云ふ性質が島渡もありませんものね」

ロードゴーリングは笑つた「それはひどい、それなら之れを世間に知らせる必要がありますね」

ベジルドン夫人も笑つた「宅だつて云ふです、全くやもめか寡婦の暮しのように家庭本位ですから」

マーチモンド夫人はベジルトン夫人の手を握りしめた。彼女は何となく氣が滅入つて來た。

「可愛相に私達は批の打ち處のない良人を持つてゐて、それで甚い目に逢つてるんですかられ」

ロードゴーリングは「オヤ、それは旦那樣の方の言分ではありませんでせうが」と二人を跳めた。

「ゴーリング樣は他の事は皮肉でいらつしやるけれ共御自身はチエベレイ夫人と話をしてゐられませんですか」

一チエベレイ夫人ですか、美しい女ですね」

ベヅルドン夫人はぶつきら棒になつた「オヤ御大層に、然し私達の前で他の女を賞めることは止して頂戴な。私達の賞めるのを待つてゐるのですものねえ……」

「ロードゴーリング、今迄待つてゐたんですがね」

マーチモント夫人はすねたやうになつた「いや私達はあの女は賞めませんよ——月曜の晩でしたか歌劇の夜食に行つて、倫敦の社交會は洒落者許りでだらしがないといつたんですつて……」

ロード、ゴーリングは眞顏になつた。「それや事實なんですかられ……。男はみんなだらしがなくつて、女はみんな洒落者なんだそうでせう？」

「いづれあの女の言つたのは、その意味なんでせう」とマ夫人は言つた。子爵は「勿論ですよ、兎に角譯の通つた事を言つたものだ」恁う言つた頃。マルチルターン孃の姿が見えた。孃は、

「オヤまあ、茲でもチエベレイ夫人のお話しですか、何故其麼話をなさるの」マーヂモンド夫人は「私はれ、オのある人の顏を視たり美しい人の話を聞いたりするのが大好です❷」

ロード、ゴーリングは「それや貴女病的といふものですよ、マーチモント夫人！」

「そうてせうか。それなら本當に嬉しいわ。私達の結婚してから七年にもなるですが、まだ宅は一度も私の事を病的だとは云ひませんでした、男は本當に氣がつかないのれ……」

ベチルドン夫人はマーテモント夫人に向き直つた「私は何時かも云つたじやありませんか、貴女は倫敦第一の病的な方だつて……」

マーチモンド夫人は莞爾〳〵しながら、さも嬉し相に視えた。「それや貴女は何時も同情して下さるがれえ……」

マベルチルターン孃はじやれげになつた。「それなら食慾も矢張り病的でせ

う、私何か喰べたいの、ゴーリンゲ様何卒夜食に伴れていつて下さらんですか

ロードゴーリンゲは「では行きませう」

ロード、ゴーリンゲはマベル、チルターン嬢を伴に連れだちて、立ち上つた

彼等は歩き乍ら「貴方も隨分だわ、宵から一寸も私とお話しはなさらないで、

私今晩は貴方を嫌になつてゐるのよ……」と嬢は言へば、

ロード、ゴーリンゲは「いや、私は貴女が大好き！」

「それならそれでも少し眼に立つような愛想をしていゝわ」

二人は階下へ下りた。夫人達は彼等を見送つて居たが軈がて、マアチモント

夫人は、ベヂルランド夫人に向つて、

「オリバアさん、私氣が變に遠くなつてよ、夜食が欲しくなつたわ……」

「そう私も欲しくつて堪らないわ。マガレットさん……」

「男つて我儘なのね、此麼こと一寸も考へて呉れないのだもの……」

「本當に實利主義よ、男つて本當に實利主義よ」と恁る溢し出した。その時、

ナンヂヤツク子爵は他の來賓と共に音樂室を出て爰へ來た。そうして注意深く

人々を物色した後、ベヂルドン夫人に向つて、

「伯爵さん、夜食にお伴致しませうか」

「私飲食は致しませんの、有難う厶います」と冷かになつた。

子爵は思ひきつた如に向へ行かうとした。突然立上つて子爵の腕を取つた。

そして

「ですがね、下へ御一緒に參りませうよ……」

「私は物を喰べるのが好でしてね、又すべての趣味が非常に英國風なのです」

「貴方は全く英國風なのですわ」ナンヂヤツク子爵とベヂルトン夫人はまた出

て行つた。念入の身裝をした若い洒落者のモントフオルドは、マアチモント夫

人の方へ近寄つた。そして彼は、

「夜食は？、奥樣」

「有難う、私また項かないんで厶います、しかし貴方の側に座つて見てゐませ

うよれ、」と立上つて腕をとつた。

「ものを喰べる時に見てゐられるのは余り感心しませんれ」

「では誰れか他の人のを見てゐますから」

「それも厭ですれ」

「後生だからモントフォルド樣。人中で其麼見苦しくいふことはよして頂戴よ

嫉妬の幕を演ぜるのを……」

程なく他の人々等と共に、二人は恁ういつて出ていた。行違いにサー、ロバート、チルターンとチエベレイ夫人とが恰度這入つて來た。

ロバードケルターンは「チエベレイ夫人、英國をお立なさる前に田舍へでもお越しなるお積りでゐらつしやいますか」

「さあ、ないんでもないですが、英國の水に油のはしつた如な集りには辛抱しきれませぬ。一体陰氣な丈けに英國の人は、朝飯の時に、がさがさしますが、あれは恐ろしい事です。で全く英國に逗留するのは、貴方の故ばつかりなんで

すよ」

ロバートチルターンは、寢椅子の上に腰をかけた」そりや眞面目のことなんですか」

「えゝ眞面目でなくてどう致します、私はある政治上の事と財政上のことで御話したいですが、實は承知のアルゼンチン運河會社で御座んすれ」

「それはまた貴女どしては隨分無趣味な實際問題ですれ」

「えゝ私は無趣味な實際問題がまた好きなんですよ、私の嫌ひなのは無趣味な實際家ですわ——此の二つは大變な區別がありますもの、それに私存じてゐますの、貴女はたしか政府にスエス運河の株を買つた時に、ラドレイ卿の秘書官をなしてゐらつしやいましたですれ」

「はい、そうです、スエスは大變な立派な計畫で、あれは、吾々印度への近路を造つたのです。つまり國家的の價値を有つて居たのです。だから我々の專有にしておく必要があつたのです。併しアルゼンチンの計畫といふのはたゞ株式

相場の詐欺なんです！」

「そりやロバートさん投機なんですよ。思切つた……」

「いや詐欺です。外務省じやすべての内情が分つてゐるんです。實は私特別の委員をやつて秘密に内幕を探らせたのです。其者の報告にまゐると事業にも著手してゐなければ、今迄の拂込の始末さへ、何うなつたか分らないのです。其の曖昧な工合が第二のパナマ運河と同類なのですれ、お訊れしますが、貴女はあれに投資なんどなされてはゐらつしやらんでせうね……」

「いゝえ、私は大變な額を出資してゐますの」

「それや莫迦な、一体誰れがお勸めしたんですか」

「貴女の昔のお友達で、そうして矢張り私のお友達なんですわ、その人が……」

「と云ふのは？」

「アアンバイム男爵です」

「あゝそうですか、さうといへばあの人の死際にその一件の關係があつたらしく聞いてゐました」

「あれがあの人にとつては最後の浪漫だつたのです、或は後から二番目かも知れませんが」

ロバート、チルターンは立上つた「それはそうとして、貴女はまだ私のコロオを御覽なさらないですれ、コロオは音樂との調和を持つてゐるではありませんか、なんならお伴致しませう」

「えゝ然し何だか今晩は銀色の黄昏や、薔薇の色の黎明をさくも見る氣分になれませんの。矢張り商法の話がしたいですわ……」と

チエベレイ夫人は首を振つた。そうして扇で眞似をした。ロバート、チルターンに近く來る樣に促してゐた。

「それでは注意の仕樣がありません。危險といつてもあの運河の成功不成功は勿論英國の態度で、どうでもなるのですが、私は明晩議院で調査委員の報告を發表する積りです」

「それはいけません、私と貴方との利害が一致する點に於ていけません、そうじやありませんか？」

それはチエベレイ夫人、どうした意味なんですか、私と貴女との利害の一致といふのは？」

ロバアトは愕いてチエベレイ夫人の顔を凝視た。そうして夫人の側に腰をかけた。

「ロバアトさん、打明けて言ひますと、私は其の議會の發表を何とか口實を設けて見合して頂きたいです。そうして此の運河の完成に就て世間的に價値あると信ぜらる樣な事をいつて頂きたいです。れ貴方、これだけの事を私にして下さらないですか……」

「チエベレイ夫人。其麼御要求は眞面目で仰しやるのですか、よもや？」

「えゝ眞面目ですとも、眞面目でなくつて」

「併し私には眞面目でないと思はせて下さい」と冷かに言つた。

夫人は寢椅子に凭れかゝつた「それでは態々維也納から貴方に分つて頂きたく參つたことがみんな水の泡ですか。禮さいふものはありますのに……」

「どうも明瞭りしません！」

「ロバアトさん、貴女は活社會の經驗をつんだ方だけに御自分の「價値」といふものを持つてゐらつしやいませう。此節では皆自分の價値を相場にしてゐますわ、余り無理な條件を仰せられない方が好と思ひますよ」

ロバアトは赫とした。彼は憤然として立つた「貴女は永らく外國へいらつしやいましたから、無理も仏りませんが、今英國の紳士と話してゐることは御氣附ないと見えますれ」

夫人は扇で相手の腕を支ゐた。そして愕きもせず恁う云つた。

「私は、また、相場師が内閣の秘密を賣つて金儲けをした人と話してゐると思つてゐますわ」とそろそろ底を叩きかけた。

「何だと仰る？」とバアトはだじろんだ。

「ロバートさん？私は貴方の秘密のすべてを知つてゐます、なほ、御手紙までが此手に入つてゐるんですもの！」

「手紙つて？」と愕き余がに叫んだ。

夫人は、蔑しみの色を見せた「貴方がラドレイ卿の秘書官をしてゐらつしやつた時分のアンハイム男爵宛の手紙ですよ。それ……スエス運河の株を買ひ締ゐる樣にお遣りなさつた、あの時の——政府が賣上げを發表した三日前の日附！なつてゐる手紙なんです」

「そりや嘘だ！」

ロバート、チルターンの聲は何だか嗄れてゐた。その中には、恐怖と不安と怒りの原子が悲しく縺れて居た。

「貴方は、あの御手紙が、もう破滅なつて居ると、思つて被居つたの？それはまあ……隨分……お人の好い事れ。所が、ちやんと私の手にはいつて居ますの

よ……」とチエベレイ夫人は、いくらか、苛立つて居る。

「貴女の言ふ事件は、ほんの投機に過ぎなんだのだ。衆議院は、未だ議案可決てし居なかつたのだ。偶とすると否決されて居たかも知れない……」

「否いゐ……それは詐欺なのです詐欺は何處迄も詐欺と呼ばればなりませぬと言ふのは、物の解りが早うムんすかられ。で、私は、其手紙を買つて頂かうと思ふのですが、如何でしよう……私のお願する直段として、アルセンチンの計畫を公に保護して頂いては……。貴方は、御自分の財産を、運河からお造へ遊ばしたのですもの、私達が、運河で財産造へやうとするのに、お力を添へて下さらなくちやなりませんわ……」

「……可怪な事を言ふのだれ……實際……怪しからん！」

「否いゐ……爾うぢやありません……。之れは悉皆……晩いか早いか、私達がしなければ……浮世の賭事ですよ……爾うでしようロバアトさん……」

「貴女の仰有る事は私には出來ません……」

「力を、貸さないで居られないと仰有るのでしよう。貴方は、今……斷涯の端に立つて被居るのですよ。れ……貴方は、兎も角う……條件をつける資格はありません。只……此方の條件通りに承知なされば好いのです……。……が。若し……お厭やと仰有るのでしたら……」

「爾う言つたら、什麼するのです……？」

「その時は、貴方の破滅が來るのです。それ丈けの事てすわ。お忘れ遊ばすな……英國では、道學氣質が、何の邊迄、貴方を變へて了つて居るが——。

自分が、世間の人間より、勝つて居るかの樣な顏をするといふ事は、昔は見たくても無かつたのです。それ所が、周圍の者輩よりも、勝れて居るかのやうに裝ふといふ事は、極く賤しい中流氣質の事も考へられて居たのです……。

所が、今では、此頃はやる道德熱のためと、誰も彼も、清淨とか、方正とか甚だしきに至つては、あの恐ろしい七色德行のモデルといふ如な風をしなければ聞かないのですが……さあ、其結果は什麼でしよう！……悉皆……次から次

へと、將棊倒しにころころ倒れるぢやありませんか。英國では、誰かが姿を隱さない年とてはありません。破廉恥も昔は愛嬌の一つでしたが、今となつては身の破滅です。貴方の恥は、而も、穢しいのです。什麼して貴方が、其恥に打克つ事が出來ましよう。若し貴方は……若い時に內閣秘書官をして居て、その秘密を賣つて立派な財產家となつたさしましようか。……若し不幸にして貴方の其財產と履歷が、暴露した時には、貴方は什麼なさいますか。少なくとも貴方は、姿を隱すより外に道がないでせう。

ロバアトさん……何故……貴方は御自分の敵に、外交的の掛合を遊ばさずにお自分の未來を、すつかり犧牲にする如な事をなさられば、ならんのでしよう。

敵と言へば、現實に於て、私が貴方の敵なのです。その私といふ敵が、貴方よりか、ずつと强くつて、渾山の軍勢を味方にして居るのです。貴方は貴方は立派な位置こそ、占めて被居るが、その位置が、反つて貴方に弱味をつけるのです。迚も貴方は、防ぎ切れません。そして、苦しんで被居る所を私が攻勢へ

と出かけるのです。勿論、私は道徳上の事を、彼是言ふのではありませんから其邊は何卒、公平に思つて下さいましよ。貴方は、何年か前に、一つの悧巧なお仕事をなすつたから、今が、恁うして立派な地位も得られたのです。ですから、今亦、其償を成されなくちゃなりません。誰だつて、世にある以上は、晩いか早いかに、自分のした事の、代價を拂はれば、なりません。今晩、お話する前に、貴方は、是非、あの報告を差控へて、議院で、此計畫の利益になるやうお話して下さらねばなりません……爾うでしよう……」

チエベレイ夫人は、眞摯に、恁う說いて來た。そしてロバアトの顏を覗くやうに見入つた。ロバアトは、暫し……默つて額に皺立てゝ居たが、軈かて、深い吐息と共に……

「貴方の仰有る事は……什麼しても出來ません……。」

「それは、何うでもして出來るやうになさらなきやいけません。

ロバアトさん……貴方は英國の新聞で、何麼物か、御存じですの？假りに、

私が、曲り道、何處かの新聞社へ立寄つて、此事件の眞相を話すと仕ましようか……。まあ……新聞屋……は何麼に喜ぶでしようか。假面非君子がだが、憎々しい笑みを洩らして社說を書いたり、忌々しい誹謗の貼札を造つたりする樣を考へて御覽遊ばせ……」と、意味深く言へば、ロバアトは、之れを遮つて

「お待ちなさい！ちや、貴女は、私に、報告を止めさせて、那の計畫に望みがあると言ふ短い演說をしろと仰有るのですね……」

ロバアトは昂つて恁う言つた。夫人は、寢椅子に腰をかけて、如何にも……氣を鎭めて「それが、私の條件なのです……」

「貴女の仰有るだけ……幾らでも、お金を……差上げますが……」

ロバアトは、遠慮勝な低い聲で、囁くやうにした。

「幾ら、貴方が、お金持でも、貴方の過去は、買戻されません——誰でも」

「私は貴女の仰有る事は什麼しても出來ません。え……何うしも出來ない」

「什麼したつて、爲て頂かなければなりません。若し爲さらないお心なら……」

と夫人は、苛立たしく立ち上つた。そして顔色變へて歩き出そうとした時、ロバアトは、慌ましげに取亂して、力なく慌てて、

「一寸、待つて下さい。貴女は、あの手紙を返すと仰有つたですね。爾うでしたでしょう……。」

「はい爾うです。私は明晩十一時半に、婦人席へ參ります。若し其時間迄に、貴方が、今申した如き條件で、議會に告示をして下さいますれば、私はあの御手紙を、鄭重に、心のあらんかぎり、お挨拶を申して、お返し申します」

兎に角……私は……正々堂々と行動を取るのです。誰だつて爾うするのが、道ですもの……。殊に強い權利のある時はれ……尚更ですよ。男爵も、色々の事と一緒に、其麼事を、いつぞや、仰有つたつけ……れ……。」

「ぢや……暫く……貴方の要求に對して、考へさせて下さい……少しの暇を下さい……」……苦しげに訴へるのである。

「それは成りません。今……急ぐと御即答を承りたいのです。」

「一週間の猶豫を下さい……。いや、それが何でしたら三日で好い……」

「厭けません。今晩……維也納へ其電報を打たなければならないのですもの」

「貴女は、私の一身上に何といふものを持つてお出でなすつたのでしょう あ……あ……貴女は……」と、ロバアトは……悲極と悶極のそこに嘆くのであつた。

「……事件が、持つて來たのです……」と、情けな相に言つた。夫人は、靜かに、扉口の方へと行つた。ロバアトは躍起に……呼止めた……。

「まあ……お待ち下さい……。承知しましょう……まあ……お待ちなさい！問題についても、質問をさせるやうに手譲を仕ませう……」

ロバアトは、身を切られるやうな思ひで呼んだ。そして悄然と項垂れた儘唇を……嚙み緊めた。夫人は、振還つて喜んだ……。

「有難う……。私は決局は恁うだと思つて居ました。初めから私は、貴方の天性を見抜いて居ました……。私は貴方を分析して見たりして居ましたのよ……

貴方は、別に、私に打込んでお仕まひなさるやうな事はなかつたでしようが……さあ……貴方……それでは車をお呼び下さいまし……皆……夜食を濟して上つてくる樣です。英吉利人は、食事をすますと、いつも浪漫的に流れますが、私……實の所、あれが餘り好かないのですわ……」

恁う言つた。ロバアトは室を出て行つた。

程なく、來客が入交つて來た。マアクビイ夫人は、室に這入るや急樣、チエベレイ夫人の傍へ行つた。そして

「チエベレイ夫人……如何でした……ロバアトさんは至雅至雅如才のない御方でしよう。それに面白い御方ですし……れ……？」

「本當に如才のない御方ですわ……。それに御話もお上手だし……」

「え、え……那のお方は、大層……立派な御經歷を持つて被居るのですよ。それに亦、感心な奥樣をお持ちなすつたのですよ。もう堅氣で……本當に人樣の御手本になるやうな奥樣ですわ……。それは爾うと、私も、そろそろ御暇を頂

いて……おう……明日お伺しますよ……」

「難有……」とチエベレイ夫人は、愛嬌よく迎へた。

「五時に馬車で、公園へ參りませうね。此頃の公園は、もう清々して居りますわ……」

「人の外は……爾うでムいませう……れ」

「爾う言へば、事實……爾うですれれ……。何時も言ふ事ですが、此頃の人は少々働き疲れて居るかも知れません。段々と季節が進むに隨つて、人間の腦鍵も、何となく恁う魯鈍けて來る如ですれ……。でも、其方が、智識の嵩まり過ぎるよりか好うムんすわ。智識の過度程……不粋な者は有りません。それがために、若い娘の鼻が大きく成り過ぎるのですわ……。鼻が大きくなれば、お嫁入りの、大變邪魔になるのですもの……。と申しますのは、第一男が、鼻の大きな娘を好かないんですかられ……。」と、言つて、ロオド、ケバシヤム伯の腕に倚れて「御覽遊ばせ……御免なさいまし……。」と續けつゝ、室を出て行つた

軈て、彼等を見迷つた後、チエベレイ夫人は、チルタアン夫人に向つて

「眞實に、御綺麗なお住居で御座いますのれ……。奥様……私……御蔭さまで一番樂しく、過させて頂きました。それに、御主人にも御交際を結んで頂いたので、這麼面白い事はムいませんでした。」

「良人に、お逢ひになる御用でもムいましたのですか。」

「はい……事を申しますと、あのアルゼンチンの計畫の事について、御賛同を御願ひしたやうな譯なのでムいます。貴女……あの運河の事について、きつとお聞入りでもムいましようが……」

「男の方に珍らしい程、御主人は、道理の悟りがお早いので、私は十分と經たぬ間に、御主人の御賛同を得たやうな次第ですの……。明日の晩は、此方の味方になつて、お演説をなさる相ですから、私達は婦人席へ行つて御伺ひしなくちやなりません……。もう……關ヶ原でムいますから……。」

「そりや、貴女……何かのお間違ひでしよう。あの計畫でしたら、良夫の援助

を受ける筈はないのですが――。」

「否え……もう皆な決つたのです。私は、之れで、遠い維也納から、てくてくお邪魔に參つた甲斐がありましたといふものです。――最も、此事は、向ふ二十四時間は、絶對に秘密を守らなければならないのでムいますよ……」

「……秘密ですて……？」と、チルタアン夫人は、不意に叫んで眉毛を顰めたそして尚……物柔かに「誰と……誰に……秘密……？」

「御主人と私との秘密でムいますわ……」と、チエベレイ夫人が幾らか相手を蔑すむやうに言つた。丁度其時……ロバアト、チルタンが這入つてきた。

「車が參りましたよ……」と、チエベレイ夫人に言つた。

「では、御免なさいまし奥様……。失禮をいたしますガリング様。私クラッツジホテルに居りますから……貴名……名刺を置きに被入るでしよう……？。」

と。客の一人であるロガドコガリングは

「お望みとあれば……」

「まあ……其麼……他人行儀な事をお止しなさいな……。でないと、私の方からも、貴方の方へ名刺を置きに行かなけや、ならぬやうになつて參りますわ。英國では其麼方式ではないでしようが、外國はもつと開けて居るのですよ。貴方五階下返送つて下さいますか……。え……ロバアトさん……」と、ロバアトに向つて……。

「私達は、之れからは、切つても切れない共通の利害を持つて居る。ですから切望御懇意に御願致します」

と、言つたチエベレイ夫人は、主人サア、ロバアトの腕に倚つた。彼女は、主人と共に悠々……之れ見よがしと言ふ顔付で、室を出て行つた。ロバアトの妻——チルタアン夫人は階段の頂き迄行つた。そして二人の降り行く樣を見て居たが、何となく其表情は、忌々しさと不快さに、沈んで來た。彼女は、浮ばぬ心を抱きながら、他の來客と混りて、他の應接室へと出て行つた。

室には、主人の妹、マベル、チルタアン嬢と、子爵のロガド、ゴオリングの

只二人となつた。マベル嬢は、「オリング子爵に向つて言つた。

「何ういふ嫌らしい女でしよう……！」

「もうお休みなさい……な……マベル樣……。」

「まあ……隨分の事を仰有るのね……貴方は……」

「一賠間斗り前でした。僕の親父が、早く歸つて寢ろと言つたのです。だから其同じい忠告を、貴女にしたつて、惡るいといふ法はないでしよう」

僕は、宜い忠告は、何時でも自分斗りが喰べないで、人にも讓る事にして居るのですよ。忠告の仕末なんかは之に限りますよ。實を申せば、自分に何の要もない物ですから……。」

「貴方は、何時も私を室から外へ、出そう出そうとなさるぢやありませんか。本當に宜うも、まあ……其麼事が言へるのね……。私は、未だ、之れか何時間も寢やしないのですよ。まあ……寢椅子に腰をかけて……お關ひなくば私と一緒にかけて、面白い世間話をなさいな！只王立美術院と、チエベレイ夫人と、

メコットランド訛のさす小説の話は御免だは……。だつて其麼話は、面白くも可笑もないのですもの……。」と、孃は恁う言つて、寢椅子の上の羽根蒲團の蔭に、半分隱れて居る品物を見つけ出した。「あら……之れは何でしよう？誰か、ダイヤの矜針を落して行つてよ。まあ……大層綺麗な事ね……！此が私のだと好いですが、姉さんは、眞珠の外、私にもる這麼ものを着けさせないのよ。」

だから、私……眞から眞珠が嫌になつちやつたのよ。眞珠は何だか恁う……不華美で、溫和しくて、悧巧相に見ゆるが……。

それはそうと、之れは誰の……プロオチでしよう……？」

「誰が落しか知らないが、綺麗な腕環だ……。」

「腕環ぢやなくつてよ……。プロオチよ……。」

「腕環になりますよ……」と、襟留をせよりもつた。綠色の手紙挾みを取出して、それを丁寧に藏つた。彼は……軈かて、それを極めて虛心を飾つて、衣靈に收めた……。彼は、孃の顏を眺めた……。

「何をなさるの……貴方は……？」

「マベル孃……貴方に妙な事を御願ひしたいのです……がね……」

「爾う……ぢや却望仰有つて頂戴……私肯から待つて居ましたのよ……。」

「私が、此襟留を持つて居る事を、誰にも言はぬやうにして下さい。若し誰かが手紙でくれと言つて來たら、直ぐそれを知らして下さい……。」

と、いくらか、面喰つて居た彼は、恁う熱心に言つた。

「妙な御願だ事れ……」

「實は此襟留を、何年か前に、ある人に上げた事があるんですがね……。」

「爾う……」

その時、チルタアン夫人が這入つて來た。もう來客の全部が散會して仕まつたのである。マベルは姉を視て……そして亦子爵を視た。

「それでは寢む事に致しましよう……。姉さん……お寢み……。」

チエルタン夫人も「お寢み……」と答へた。マルベルは靜かに室を出た。

マベルが行つてからチルダアン夫人は、ゴオリングに向つて

「貴方は、今夜、あのマアリビイ夫人の連れてお出でになつたお方を御覽になつたでしよう……？」

「ええ……意外な事でした……面白くもない……。彼女は、何を仕に來たのですか……。」

「亞爾典丁の運河れ……。まあ那の詐欺同樣の事業に贊同をして加之に、後楯になつてくれいと、良夫を誘惑に參つたのですよ……」

「左うですか……ぢや相手を見損つて居るのだれ……。」

「ええ……彼女は……良夫の堅苦しい氣質を知らないのですよ……」

「左うだれ……。若しロバアト君を思ふ壺に、籠めようとしたのでしたら、失敗でしよう。餘り悧巧すぎると、異論の失策を、女と言ふものはやる物だ。」

「だつて貴方……那麽種類の女を捕へて悧巧だとは言はれないは……莫迦さいふ外は……言ひやうはありませんわ……」

「まあ……多くの場合に於て、同じい事ですよ……。いや……御寢みなさい……奥樣……。」

「では、御免を蒙りませう……。」

と、言つた時、主人のロバアトが這入つて來た。

「ゴオリング君……未だ歸るのぢやないだらう……まあ……ゆつくり仕給へ……。」と主人は、子爵に言つた。

「難有ふ……だが、僕は未だハアトロック家へ立寄らなきやならないのだよ。あすこでは、ハンガリイ音樂があるので……。亦……お邪魔をするよ……や……失禮します……。」と、子爵は出て行つた。主人は夫人に向つて

「お前……今晩は實際……粋だよ……。」

「貴方……あの亞爾典丁の投機に、お力添へをなさるやうな事はないでしよう れ……。……れ……貴方……？」

「誰が其麽事を言つた？」と主人は愕然として語調と顏色を變へた。

「今はチエベレイ夫人とか言ふ女です。私に其麽事を言つて責めるぢやありません……か。貴方は御存ぢやありませんが、私達は學校に一緒に居たのですから、あの女の事は、充分知つて居ますわ……。

あの女は嘘吐で、曲り屋で、ずるくつて、誰でも交際を結んだ人に、惡い感化を與へるのですよ。私達は……あの女の顏を視るさへ、慄然とするの……。だつて、あの女は泥棒ですもの……。物を盜んだから退校されたのですよ。何故……貴方は亦、那麽女の言ふ事をお聞きなさるの……」と昂奮する。

「お前の言ふ事は、あるひは事實かも知れないが、其麽事は忘れて仕まつた方が宜い……もうずつと前の事だからな……。あの女は、それから心を入れ變へて居るかも知れない……人間といふものは、全然過去斗りで判斷する事は出來ないものだ……」と愼ましげに宥めた。

「……まあ……だつて貴方……過去は軈かて其人の現在ですわ。人を判斷する道は其人の過去より外には、何も厶いません……」と顫へた。

「そりやお前……あまり酷過ぎる言方だよ……」

「否え……本當なのです。特に、貴方が、政治界立ち初まつて以來の不正な、詐欺同然な、計畫だと言つて被在つた事件に、その御本人の貴方を、說き伏せて居ました……」

「俺は、今迄の見方を……誤つて居たのさ。誰だつて誤解といふのはあるからな……」と苦しげに唇を嚙んだ。

「だつて貴方は、昨日、委員の報告を受取つて、其報告は、全然、あの事件に反對して居ると仰有つたぢやありませんか……。」

「俺は、今になつて委員の考違ひをして居る理由を視出したのだ。それにお前公生活と私生活とは全然の別物だ。此二つは異つた法則の本に繫がれて、異つた道を歩いて行くものだ……。」

「だつて二つ共……清い高い人格を表はさればなりません。私は、其間に於て

は何の變つた事もないと思つて居ります……。」

「だがお前、今は實際政策上、自分の決心を變へたのだよ。それ丈けの事さ……。」と室内を行つたり來たりして居たが、立止まつて恁う言つた。

「まあ、それ丈けですつて？……私……這麽事を御尋ねするのは、本意ない次第でありまするがれ……貴方……貴方は夫れで、私に本當の事を、仰有つて居られるの……？」

「何故其麽事を聞くのか……？」

「何故……きつぱりと、それにお答へ遊ばさないの……？」

「眞實と言ふ事は、非常に、複雜なものだ。政策といふ物も亦、複雜な物だ……機關中の機關といふのは……恁うしたものさ。債務は、拂はねばならぬ場合がある。遲かれ早かれ、政治界には、誰でも妥協といふものに便るものである そして誰でも……妥協の力を貸るのである……。」

「妥協……まあ貴方は、今夜に限つて何故……其麽話振をなさるの……？」

「俺は變つて居ない……。が、周圍が……物事を變へるのだ……。」

「だつて周圍の事情で、主義を變へるといふ事はありません……。」

「ぢやお前に、主義を變へる事が是非、必要だと言つたら、お前什麽する……かい……？」

「不名譽の事をする必要はないぢやありませんか……？若し、それが必要な事とすれば、此迄私の愛して居た事は、什麽なるでせう……！……必要はないと言つて斷つて下さい！什麽した利益があるのですか……？お金……です……？お金ならば、此上要りはしません。特に、汚れきつた源から出るお金なんかは腐敗して居ります。ぢや力です？……力はそれ自身にとつては何でもありません。でも美しい事をするのが力でしよう……。

　　れえ……貴方……貴方は何故……其麽不名譽な事をしやうとなさるのですか……？」

「お前は、其麽事を喋々言ふ權利はない。理屈から來た妥協問題だと言つたぢ

やないか?!それ以外には俺にとつては何のいはれもないのさ……。」

「之れも……自分の一生を、唯汚はしい投機の如にする人なら宜いのですが、少なくとも、貴方には其麼事は、出來ません……。貴方の生涯は、之れ迄他の人とは、全く懸離れて居ました。貴方は決して世間から、御自身を汚されるやうな事はなさいませんでした。

世間に對しても理想に對しても、私に對しても立派なお方でした。何卒……何時迄も、其御心で、居て下さい。切望、その寶の如な理想を棄てない如にして下さい。その「象牙の塔」を壞さないで下さいまし。男は自分よりも下の……汚らはしい女……詰らない女を愛する事は出來ましようが、けれども女は愛すると同時に崇拜するものです。崇拜が出來なくなれば、何もかも失くなつて仕舞ふのです。後生ですから、私の愛を殺さないで下さい。……れ……後生ですから……　私の愛を殺さないで下さい……」

と良夫に縋り付く如に賴むのであつた……。良夫は……

「ゲルトウド……」と一聲呼んだ切り項垂れて居た。

「世間には、自分の生涯中に、恐ろしい秘密を持つて居る人があります。何か破廉恥をやつて、いざといふ場合になると、他の汚れた行爲で、その償をしなければならぬ人が間々あります。貴方は正眞其麼事はないでしよう……れ……貴方は……自分の一生に何か秘密の……不名譽か、失態かがあるのですか……言つて下さいな……れ……言つて下されば……爾うすれば……」

夫人は絶望と決心との底を亢る悲しい聲で、慄う顫へた。

「爾うすれば什麼するのか……」

「……爾うすれば、二人が別れ別れになる迄です……」

夫人は咽歔るやうに、徐に沈んで行つた。

「離れ別れになる……と……？」と良夫は思はず甲高く叫んだ。

「ええ……お互の心が、全く別れて仕舞ふやうにね。其方が、二人のために宜いでしよう……」

「喃お前！俺の過去には、お前に言つてならん事が一つも無いよ……」

「爾うでしようともね……。それでこそ眞の貴方ですわ……。貴方何故……最刻、那麽事を仰有つたの？眞の御自分と、似もつかぬ事を仰有つてよ……。

さあ……お手紙をお書きなさいな……。そしてチェベレイ夫人に、援助が出來ないと言つてお送りなさいな。若しお約束をなすつたのでしたら、それを破約なさいまし……そうすればそれ迄の事ですから……。」

「……手紙を書くよりか、直々に逢つたら什麽だらう……？」

「否いえ、二度と、那麽お方に、逢つて下さいますな。あの女は、貴方と話をするやうな上品な女ではありません。價値のない女は口をきく必要はありません。それよりか、お手紙をお書き遊ばせ……御自分の強い動かす事の出來ない處を見せてお遣りなさい……今直ぐに……。」

「今書くのかね……だつてもう晩いぢやないか……。十二時だもの……。」

「十二時が一時でも關ひません。向ふが貴方を見誤つて居たといふ事を直ぐに

知らせてやらなくちゃ厭けません。貴方は、其麽賤しい、後暗い……不名譽な事をする人ぢやないと言ふ事を、知らすのです。此處で、お書きなさい。

――貴女の計畫を援助するのは、不正な計畫と思ふから、拒絶します――と言つて、中でも不正といふ事を、きつぱり書いてお遣りなさい。向ふでは、其不正といふ事に、丁と……思ひ當る事があるんですから……」

ロバアトは、靜かに……手紙を書出した。閊錯の色は、痛ましい程に變る顏色に顯はれて、その筆持つ手も顫へるのであつた。彼は書き終つた時、夫人は讀んだ……。そして……「之れで宜いわ……。」と言つて鈴を鳴らした。下男頭のメエゾンが這入つて來た。夫人は、此手紙を、直ぐに、クラアリッジ、ホテルに持たせて遣つておくれ……返事は要らないのだから……と言つた。メエゾンは去つた。夫人は、物寂びしげに座る良夫の側に跪き、良夫の周圍に腕をやつた……。

「ねえ……貴方……愛から物事に對する直覺が來るのですよ。私は……今晩、

貴方を危地から救ひ上げたやうな氣がします貴方は、左程御存知でもない樣子ですが、貴方は、今迄は、深い周圍……高い理想……高尚な見地……無垢な懷望……自由な空氣を固持して被入つたのですよ。私はそれを承知して居ます。夫れだから、貴方を愛するのです……」

「何時迄も……愛しておくれ！何時迄も愛しておくれ!」と心から叫んだ。

「ええ……何時迄も……愛しますとも。貴方は何時迄も、愛を受ける價値があるのです」と夫人は良夫に接吻をした。そして快けに出て行つた。ロバアトは暫くの間を、室を行つたり來たりして居たが、軈かて腰を掛けた。我顏に兩手をかけて埋めた。其時召使が靜かに這入つて來た。眠るが如き調子で。燈火を消し初めた。主人は、顏をいやいや擡げた……それに氣がつきて。

「燈を消しておくれ……燈を消してくれい……」と泣くやうに言つた。

メエヅは燈を消した。部屋は烏羽玉……只一つの燈が悄然と階段の上に掛り「愛の勝利」の綴織を寂しげに照して居た。

翌る朝、ゴオリングは、ロバアト、チルタアンの家を訪れた。

ゴオリングは。モオニング、ルウムへ通されて、其處で話をした。

ゴオリングは、肱掛椅子に、だらしなく靠れた。ゴオリングは、流行のスタイルで、めかして居た。

話が、段々と進んだ。ロバアトは、煖爐の前に立つた。

彼は非常に昂奮して居た。彼の痛ましげな表情に依つて、誰だつて、胸中の鬱痛を推す事が出來る。軈て、ロバアトは、神經質に昂ぶり來る儘、室内を、あちら、こちらと歩いて居た。その時、ロオリングは……

「ロバアト君　そりや實際、面倒な事だね……。其麼事だつたら、奥樣に、何も彼も打明けて仕舞つた什麼だね……其方が好いよ。他人の妻君からの秘密は現代の欠くべからざる贅澤だが、然し、自分の細君に秘密を作つては面白くないよ。そりや君は何といつても見付かるよ」

女と言ふものは、物事に對して、驚くべき本能を具へて居る。分り切つた事

の外は、何でも探し出すものだ……」

「だが、君什麼して其麼事が打開けられるか？……昨夜も駄目だつた！　若しか、其事を打開ければ、二人の間には、悲しい一生の破滅が來るのだよ。

そして、今迄世の中で、一番、自分を拜崇してくれた女……今迄、自分の心に、戀といふものを起させた唯一人の女……その女を、自分から失はねばならぬ如になつてる。若しか、自分が昨晩……打開けたとしようか……少なくとも彼女は、名譽と侮りから……逃げて行つたでおらう……」

「だが、君……奥樣は其麼に缺點のない人でもなからう……。」

「……全く……欠點のない女だ！」

「……それが事實なら、僕は、奥樣に對して、眞の人生といふ事を、眞摯に話して見たいね……」と、ロオリングは、手袋を脱りながら言つた。

「其麼事をしたつて駄目だ。彼女の見方を變へる事は、出來ないよ」

「だが遣つて宜いだらう。若しそれが惡く行けば、單に心理の實驗さ……」

「其麼實驗は危險なものだよ。」

「ロバアト君……總べての物は、危險な物さ！若し、危險のない者だつたら、人生は生きて居る價値がない……それにしても、君が、幾年か前に、打明けるべき筈であつたと言ふ事を、言はなけやおらない……。」

「婚約をした時とでも言ふのかい？　君は——自分の財源……自分の經歷……自分の恥……自分の不名譽……を知つた上で、彼女は僕と結婚するのが當然だと思つて居るのかい……？」

「爾うだ……大抵の人間は、君が爲した事を惡るいと言ふよ……。亦、それに違がないのだな……。」

「爾う言ふ奴等こそ……自分自分の生涯に於て、僕よりも、もつと惡るい事を……惡い秘密を持つて居るのだよ……」

「爾う共……爾うだから、他人の秘密を暴さたがるのさ。自分の秘密を、世間が、見逃れるからさ……。」と、主人は徐ろに言つた。

……そして結局……僕は誰に、自分の爲した事から禍をかけただらう……？
誰にも禍をかけない筈だ……」と主人は悄然と言つた。ゴオリングは、迷ひ
げに、ぢつと相手を凝視めた。彼は力の籠つた聲で……。
「君自身の外は……誰にもない！」
「勿論、其時の政府が考へつゝあつたある計畫の内情を利用した事はあつた。
内通といふ事は、少なくとも、此財産の源となつて居るのだかられ……」
「而も、公然たる疑獄が、其結果になつて居るのだ。」
ゴロオリングは、藤枝で、長靴を叩きながら相槌を打つやうに言つた。
「れ君……殆ど十八年も以前に遣つた事が、今更持出さるべきものだらうか。
人の全經歴が殆んで、子供の時に犯した落度のため、打壊れて仕舞ふのが、果
して當然の事だらうか。あの時は僕は未だ二十二、加之に身分が高くて貧乏だ
といふ二重的不幸……今の世では赦す事の出來ない二つの不幸を備へて居たの
だ。その一寸した罪……罪と言へば罪だが……それが僕の一生を滅し、僕を

……罪臺の上に曝し……今迄全力を注いだ物……その造り上げた物が、凡て無
慚にも打壊されて仕舞ふのが、果して公平だと言へようが……れ……君」
「人生は爾うした公平な物ぢやないよ。その公平でない所か、寧ろ自分達の好
都合とする所さ……。」
「野心家たるものは、自分自分の武器を持つて、其時代に戰はねばならぬ。今
の時代の崇拜するものは即ち……金だ……今の時代の神は富にして成功は即ち
富を以て斗られて居る……。如何してでも富を得なければならない……」
「そりや、君は自分を餘りに安くに見積つて居る。富なんかなくつたつて、君
は……君で、同じ如に成功して居るよ……」
「年が老けば、或は爾うかも知れない。が、それは「力」に對する慾望が失し
「力」に對する味を覺ゆるからである。——疲れて、弱つて、望みがなくなつ
たからだ。僕は若い内に成功が欲しかつたのだ……」
「爾う言へば、君は未だ春秋富むの頃……慥かに成功の人となつた。誰だつて

今時の者は、那麼に美事な事は、出來やしない……。四十にして外務次官とはまあ……難有過ぎるからな……」

「併し、それが悉皆、今、自分から取去られたら、什麼だらう……。忌々しい恥辱の本に、何も彼も奪ひ去られたら什麼だらう？公の生活から追ひ出されたら什麼だらう……」

「君は、何故、金で、身を賣るやうな事をしたんだ……」

「金のために、身は賣らないよ。つまり成功を高い代價で買つたのだ。それ丈けの事さ……」と惱ましげに言へば、子爵は沈痛に……息を細めて

「確かに爾うだ！だが何から其麼事をする氣になつたのか……れ。？」

「アアンハイム男爵さ……」

「……うん……あの……忌々しい畜生……かい……」

「否や、爾うぢやない、男爵は極めて、鋭い高尚な頭腦を持つたやり手だ。敎育もあれば、人を魅しもし、衆から圖抜けても居る。自分の今迄逢つた人の中

では、一番に聰明な人さ……」

「あゝ、だから……僕は、日頃、紳士らしい莫迦者が好きなのだ。莫迦には、世人の想像の出來ない取柄がある。僕は、莫迦といふ事については、非常に敬慕の念を抱いて居るよ。恐らく同性相求むるといふ譯だらう……。だが、男爵は什麼して、其事をやつたのかい？僕に其の事態を話してくれ……」

「ある晩の事だ。」と言つた主人は、机の側の肱掛椅子にどつかり坐つた。「……ラッドレイ卿の宅で晩饗を終つてから、男爵は、近代の生活上の成功をば、何處迄も、確然した科學に引戻す事が出來ると言ふ如な事を、說いた。あの恐ろしい人をチャームする聲で、男爵は、ある哲學中の哲學として恐るべき力の哲學を說いたのだ。あらゆる福音中の福音……最も不思議とする黃金の福音……を訓へたのだ。處が、男爵は、僕のチャームされたのを悟つたと見ゐて、幾日か經つて、逢ひに來るやうにと手紙を遣したのだ。其頃は、男爵は、今のウールコガム鄕の家に棲んで居た。僕が未だに宜く覺えて居るが、男爵は、血の氣

のない、緊乎(きつと)した唇に、氣味惡るい微笑みを浮べて、僕を迎へたのだ。

男爵は、立派な繪畫の陳列室や、綴織や、七寶や、寶石、彫刻物等を僕に視せた時は、僕は、實際……驚嘆(おどろ)いたのさ。そして僕に恁う言つて聞かしたのさ

――贅澤は唯背景(バック)に過ぎない。丁度芝居の道具同樣である。だがその力――他人に及ぼす其力や、世に及ぼす其力こそ、價値ある唯一の物である。經驗に値する最高の歡喜……倦く事の知らない唯一的悅樂……こそ、即ちそれであつて然して金の有る者のみが、それを專有するのだ。少なくとも現代(ナウアディ)に於ては――と、恁う言つたのさ……。」と彼は力の這入つた聲で言へば、ゴオリンゲは甚だ深い思ひに陷つた……。

「非常な淺(あさはかしんでう)慢な信條たな……。」

「僕は爾う思はなかつた。今だつて爾うは思はない！富(ウエールス)こそ自分に偉大なるポーワアを能へてくれたのだ。自分の生涯に自由を與へてくれたのは即ち富さ！君は、貧乏した事もなければ亦、野心とは何麼ものかさへ知らない。隨つて

男爵が、自分に何麼(どんな)機會を與へてくれたかも解らないだらう。その與(あた)へてくれた機會こそ、小數の者しか得られない……貴い機會なのだ……」

「其小數の人は、幸福になる譯だれ――若し結果丈けで判斷するとすれば……だが、什麼してあいつが、君を說服せしめたか、其處を、はつきり言つてくれ給へ……。什麼して君に、那(あ)あした事を、やらするやうとしたかをさ……」

「僕が歸らうとすると、男爵は、僕に向つて――若し何か眞實の……價値のある內通をしてくれたならば、僕を非常な金持ちにしてやる――と、恁う言つたのさ。僕は實際、男爵の害出した此期望に、眼が眩んだ。それに「力」に對する自分の野心(アムビション)や慾望(デザイヤ)は、當時は無限に廣かつた。それから丁度六週間目にある秘密の書類が、自分の手に這入つたのさ――。

「つまり官文書だな……。君は、あいつの差出した誘惑(テムティション)位に陷るとは、案外の弱腰だつたれ……。世の中の奴等はいざ知らず……君程の男がさ……。」

「しつとりと絨氈(もうせん)に目をつけて居た彼は、額に手をあてゝ、頭を上げる主人に

向つて爾う言つた。彼は、吐息をつけば、主人も吐息をついた。

「ゴオリング君……もう弱い……弱い！……弱いふ君の言葉に聞飽いた！亦、他人に使ふのも、使飽つた……。弱い！……。恁う實際、君は思ふのかい？誘惑に應ずるのは弱いと、君は思ふのかい……？だがゴオリング君……それに應ずるには、少なくとも、氣力と勇氣が要るよ。唯の一瞬間に、全生涯を賭するといふ氣力は要る！それは決して弱いとは言はれまい。自分は弱かない！凄い……怖ろしい勇氣があるのだ！僕はその日の午後、一通の手紙を書いた。その手紙も、今あの女の手にあるのさ。男爵は、その一件で、七十五萬磅の金を儲けたのさ……。其時、僕は十一萬磅……受取つたのさ。」

「きつと價値があるぢやないか……おい君。」

「いや、其金が、自分の慾しがつて居た正しい物であつたのだ。僕は其後間もなく議員になつた。男爵は時々、財政上に忠告をしてくれた。僕は五年も經ぬ間に、殆ど財産を三倍にして仕舞つた。その後、自分の手觸るものは、さんと

ん柏子に成功と化つた。あまり金融に對して素張らしい僥倖を持つて居たので自分ながら氣味の惡るい事もあつた。」

「然し、ロバアト君……君は自分のした事に對して後悔の念を起すやうな事はなかつたかい……？」

「後悔などはするものか。只……時代の武器を持つて、時代と戰つた。その結果が勝利となつたのだと思つて居た。」

「自分では勝つたと思つて居たのだれ……」と子爵は哀けに言つた。ロバアトは悶えげに、暫しは無言であつた。

「其積だつたよ。這麼事を言つて君に愛憎をつかされるかも知らぬが……。」

「否や……氣の毒なのさ……實際……氣の毒なのさ……」と感傷に聲は淀んだ

「僕は後悔などはしなかつたが、つまり自分の運命の武器を奪はるゝといふ役でもない望みを抱いて居たさ。僕は、男爵から貰つた金高の二倍以上も、公敎の旅興にふり撒いたのだ」と……怨めしげに子爵を眺めた。

「公共の施與に……？それぢや隨分……害毒を流したのだれ……。」

「……君……其麼事を言ふものぢやないよ」と主人は寂しげに死のやうに笑つた「……其麼物言ひは……赦してくれ給へ。」

「否いや、僕の言ふ事なんかに氣を止め給ふな。僕はむきだしに言ふ癖があるから……實を言へば、僕の言ふ事は、自分の考へる儘を言ふのだがね……之が大体今の世の中では、納れられない事だ。誤解をされる憂がある。だが、その怖ろしい事柄については、自分のベストを盡して君を助けよう……亦……之れが當然の事だが……」と勇ましい情が、眉宇の間に迸るのであつた。

「難有ふ……有難……だか君、什麼したものだらう……什麼いふ方法を講じたら宜いだらう……？」と焦りげに……便りけに謝しげに子爵を眺めた。子爵は兩手を衣囊に入れて背後に靠れた……。そして言つた。

「爾うさね……。兎に角英國人の唯一の美點としてほこる事は、自分から自分が正しい……正しいと始終言つて居る者を赦さないといふ事だ。

だか、君の立場としては、もう懺悔は役に立たないよ。金の事は、まあ君は變に思ふかも知らないが、迚も仕末につかない！まづ全体の事を打明けて仕舞ふと第一、君は、二度と德義を口にする事は能きない。英國では一週間に二度その低層社會の不德義な聽衆に向つて、德義を說く事の出來ない者は、うも眞摯な政治家としての資格はないのだからな。まあ……その連中のお商買は植物の研究か、教會の數位のものさ。懺悔は……何のためにもならない……懺悔をすれば、君は破滅だ……。」

「爾うだ……。僕の破滅だ！今僕の遣るべき事は、只最後迄戰ふといふ事が只一の道だ……」と叫んだ時、子爵は椅子を起つた……そして

「君の爾う言ふのを待つて居たのだ。今はその方の道一つだ。で、先づ、其手初めとして……奥樣に事詳からに明かして仕舞ふのだれ……」

「……だが、それは出來ない……。」

「君……宜く考へて視給へ……君は……考違をして居るから……よう。」

「よそれは出來ない。そんな事をすれば、僕に對する彼女の愛は失くなる……」と言つて憎々しげに語調をかへ「さて、……あの女だ……チュベレイといふ女を什麼して防げは宜いだらう……。確か君は以前……懇意だつたやうすだが……」

「あ……何有……ほんの少しさ。テンビイ家に滯在してた頃、結婚の約束をした位の事さ……。其婚約は三日も續きけりだ……。」

「何故破約をしたのかい……。」

「其麼事は、もう忘れて仕舞つた。が、彼女は……非常にお金好きだが、君……彼女を金で釣つて視た事があるかね……。」

「僕は、ある丈け金をやると言つたが、向は拒絶したのさ……。」

「黄金の福音……其處に至りては駄目だね……。金持は、全能的に世を支配するものだとも言はれないかられ……。」

「爾うかね。兎に角、自分は今迄恐怖といふものを知らなかつた。が、此頃は慫りと不面目に犯されて居る……。丁度氷の手が心臓の上に置かれたやうな心

地がして、心臓がびくく〳〵と空虚の中にあるやうだ。そしてだん〳〵死に近づいて行くやうな心地がする……」としほげて來た時子爵は卓を打つた

「……おい君！君は、あの女と戰はなくちやならない！戰ふのだ！」

「だが什麼いふ風に戰ふのかい……？」

「そりや敵の陣形によつてさ……。誰だつて人間には、弱點のないものはない我々は悉皆……何かその中には弱點を固持して居るのである」と言つて暖爐の傍に近寄つた。そして自分の顔が鏡に映るのを凝と眺めた。「親父に言はすれば此僕にだつて欽點がある相だ」

「あの女に對して防禦するには、僕は何麼武器でもあるだらうな……。」

「僕が……若し君の位置にあるとすれば、何有……躊躇するもんか……。彼女は、充分に我身の用心が出來るのだから……。」と、鏡の我顔に見入りながら恁う言つた。その時主人は机の前に、腰をかけ、手にペンを取上げた。

「よし……僕は、之れから維也納の大使官へ、暗號電報を打つて、何か、あの

女に不利な事がないか探つて見よう。事によつちや、また、何麼秘密事件もないとは言はれぬから……」

「だが、僕は思ふのには、あの女は、近代的の女だから、新らしい事件は、新らしい帽子（ボネット）と一緒に、我身を飾るものとして思つて居るだらう。そしてそれを毎日五時半頃に、公園中を、かざり誇つて歩くつもりぢやないかしら……。

彼女は、きつと事件といふものを崇拜して居るよ。そして、今の處、彼女の悲哀とする物は、その事件を、造り上げる事が出來ない事ぢやないかしら……」と言つて襟の花束を正した。ロバアトは書續けながら……。

「何故君は其麼事を言ふのかれ……。」

「そりやそうだ。昨夜だつて、頰紅を塗りすぎて、着物を着たらなかつたやうぢやないか……あれが即ち、女の絶望の印だよ……。」

と言つてロバアトは、昂奮して……鈴を鳴らし。

「……それにしたつて維也納へ電報を打つても無駄ではないだらう……」

「無駄ぢやない。問に對して其答へが無駄の時もあるが……」

其時、メヂリンが這入つて來た。メヂリンは、その暗號電文の這入つて居る手紙を主人から受取つて出て行つた。

「れ……ロオリンゲ君……あの女は、アアンハイム男爵に、何か不可思議な力を持つて居たに違ひない。一躰……何だつたのだらう？。」

「さあ……何だつたのかれ……。」

「兎に角……妻が知らない間は、斃れる迄……僕は戰ふよ！」

「爾うだ……何麼場合にでも戰ふのさ……。ええ……戰ふのだ共……」

「……だが……」と……絶望的に陷つて來た……その聲も顫へて居た。「若し妻が知るやうな事になれば。もう僕も、戰ふ餘地がなくなる。兎に角……誰也納から返事が來り次第、知らすとしようよ……君にな……。そして、僕は時代の武器を持つて戰つたやうに、彼女の武器を持つて、彼女と戰ふのだ。それに、彼女は、何となく過去のあり相な女ぢやないか……。」

「綺麗な女は、大抵、爾うしたものさ。そしてヘロツクに流行があるやうに、女の過去にも流行がある。大方、那の女の過去といふのは、少々、胸の開いてゐる過去なのだらう……。所が、その胸の開いて居るのが現代では普通となつて居るのさ。それに君……何方かと言へば、僕などは、あの女を脅かすといふ事については、あまり大きい望みをかけて居ない。といふのは、那の女は、今迄に、總ゆる敵と戰つて、悉皆勝利者の位置に立つて居るからな……。實際、膽力のある女だよ。」

「僕は……今は、希望に生きるのだ。そしてあらゆる機會を摑むのだ。僕は、沈み行く船の乘客のやうな心地がする。水は足のまわりに怒りて、空の暴風は刻々と荒んでくる……。あゝ……君……一寸——妻の聲がするやうだ……」

其時、チルタアン夫人、散歩服にて這入つて來た……。チルタアン夫人は、ロオリングに向つて挨拶をした。そして、子爵か、公園へ入來つたかと言へば夫人は、否いや……改進婦人會から歸つて來た處なのだ。今では、貴方のお名

が非常に歡迎せられて居る。暫くお待ち下さい……お茶を差上げますからと言つた。

夫人は尙、ロオリングに向つて、會の方では大切な仕事で、つかへて居りますと言ひ添へた。ロオリングは、

「一体……何麼仕事ですか……」

「そりや……だら〳〵しい……有益な……面白い事ですわ。例へば、製造所條令とか、女子檢査官とか、八時間勞働の法律案とか、議會の投票權とかで……最も、何れにしましても、貴方々等には、面白くないとお思ひなさる事計りですが……」

「……いや……それよりか、其の綺麗な帽子の話を聞かして下さい……」

「する物です……帽子の話なんか……。」と夫人はいくらか……腹立ちた風情に私室の方へと出て行つた。婦人は帽子をとりに行つたのである……。

「……君は僕の味方だ……君こそ、本當に僕の味方だ……」と、ロバアトは、

感極まつたやうに、ゴオリングの手をとつた。

「僕は未だ、君の役に立つ如な事はしないよ。實際、自分ながら愛憎がつきる程、君の爲めに盡す事が能きなかつた！。」

「だが、君は、僕に眞實を言はしてくれた。もうそれ丈けでも結構だ。眞實といふ事は、今迄、自分を非常に惱ましして居たのだ」

「處がさ、眞實の事は、僕は出來る丈け早く人に言つて、始末をつけて仕舞ふのだ。が、之れは惡るい癖だね。倶樂部へ行つても非常に受けが惡くなる……殊更年寄連中にさ。奴樣達は、それを自惚れだと言ふのさ。あるひは、そうかも知れないが……。」

「眞實を言ふ事が出來たら、何れ丈け好いだらう！虚僞のない生活が能きたら何れ丈け宜いだらう！僞のない生活こそ、人生の要件だ！」とロバアトは、嘆いた。そして「亦……直ぐ遇はうよ……れ……君……？」と怎うてつて扉の方へ行きかけた。その時、夫人が私室より這入つて來た。夫人は、良夫の、疲れ

た如な顔を視て、心配相に……。

「貴方……彼方へ、入來るの……？」

「手紙を書かねばならぬから……」と言つた。夫人は尙々……眉を寄せて

「だつて貴方は、お體を使ひすぎますよ。御自分のお體の事なんか、ちつともお考へなさらない樣ですもの……。まあ……その疲れたやうなお顔をして……

「何でもないのさ……。其麼事があるものか……」と縋るやうに寄つて來た夫人を接吻して靜かに出て行つた。夫人はゴオリングに向つて

「……まあ……お掛け下さいましな……。宜うこそお尋ね下さいました。私は貴方に御相談に乘つて頂きたい事がありますの……。」

「……は……は……あ……チオベレイ夫人の事です？」

「甘く當りました事！昨夜……貴方が御歸り遊ばしてから、彼の女が言つた事が愈々……本當だと言ふ事が解りましたの……最も……良人に直ぐ手紙を出させ、約束を取消させましたが……。」

「爾うだつた相で……。」

「那麼約束を守らうものなら貴方……今迄汚れのなかつた履歴に、汚點がつくのでムいますもの。良人は非難を受けるやうな事は、しては居りません。良人は世間の人とは異ふのです。良人は、世間の人のするやうな事は出來ません」

「……」

「れ……然うお思ひ遊ばしません？貴方は良人にとつては一番のお友達でいらつしやいます。いゝえ……私達の大切なお友達でいらつしやいます。私を除けては、貴方程、良人を知つて居るお方は、ありません。良人は、私に隱して居る事はありませんが、貴方にだつて無いだらうと思ひます……。」

「……そりや確かにないでしよう……。少なくとも爾うです……よ……。」

「良人に對する私の見解は違つて居ないでしよう……？否え……きつと違つて居るやうな事はありませんわ……。れ……爾うでしよう……隱さないで仰有つて下さいまし……。」と可憐らしい言の葉に、子爵は屹と……夫人の顔を視た。

「ありません……。然し奥樣、若し這麼事を言つても宜いとすれば――實際の人生では……」と言憎相に口を切れば、夫人は滴るやうな愛張つた顔を笑ませ

「……貴方のちつとも御存知のない人生では……？え……ゴオリングさん？」

「え……貴方々の實際の人生は、私は自分の經驗では何も知りません。觀察といふ事になれば、少しばかりは知つて居ますが、で私は思ふのには。兎に角眞の成功といふものには、悉皆……多少の大膽な顆が附隨して居る。又野心ですな……あれにはあれで亦きつと太膽な影があるものです。つまり……一旦、男が、これに向つて進まうと思つた時は、金錢をも貫く道理で、岩を塲合によつては攀じます。亦泥濘の中をも……塲合によつて……。」

「は……？」

「……塲合によつては……泥濘も物ともしません……。勿論私は、唯一般の人生を言つて居るのですが……。」

「然うでせうね……。でも貴方は、何故……其麼に妙な見解から……私を御覽

になるの……？」と、夫人は咽欷るやうに、沈んで來た。

「奥様……。私は、時々考へまするのには、偶然とすると、貴女は、此人生に對する見解が、あまりに苛酷過ぎはせないでしようか。人間と言ふものは、斟酌といふ事が、大事です。といふのは、何麽人間だつて弱點を持つて居ない者はありません。あるひは、弱點よりもつと悪いものを有つて居るかも知れません。假令……ある知名の人が……私の親父でも宜いムんす。マアトン郷でも好うムんす……ロバアト君でも宜い……がれ……ある幾年かの昔、ある人にある詰らない手紙を書いた……と、恁らして見るのですな……」

「詰らない手紙と仰有ると……何麽……？」

「仰令……自分の地位に關する手紙もしましようか。勿論……私は、只暇定の場合を言つて居るのですがれ……」と

「ですが良夫には曲つた事が出來ないと同時に、詰らない事は出來ませんわ……」と言へばゴオリンゲは、暫時は言無であつた。

「誰だつて爾ういふ事の出來ない者はありません……」

「まあ……貴方は厭世家ですは……？」

「否いえ……奥様……ペスシイミストではありません。」と子爵は立ち上つた。「實はその厭世といふ中に、何麽眞味が含まれて居るか、それさへ充分に解りません。私の知つて居るのには、此人生は容赦……といふものがなければ、了解は出來ないものです。容赦があつて初めて暮す事が出來るのです。獨逸の哲學ぢやないですが、凡てが愛です——未來の説明はいざしらず、現代は實際その通りです。で、若し奥様、貴方がお困りになるやうな事がありましたならば、切望私に頼つて下さい。私は何麽にでも、否や何處迄も、力の及ぶ限りはお援助しましよう。若し、何か、私が役立つやうな事がある時は、決して御遠慮はないから、私の處へ、力を借りに被入い……えゝ……お力添をいたします共！」

夫人は、驚いた。而して相手を眺めた。夫人は……強い力を得たやうに……

「ゴオリンゲ様……貴方……眞面目に仰有つて……？だつて私……貴方が眞面

目にお話なさるのを、聞いた事はありません……。」
「そうですか……否や、眞誠にならずに濟めば、もう二度と其麼事になりませんから……」と笑ひながら……ゴオリングは言つた。
「でも、私は、眞誠に、お成りなさる方が好いと思ひます」
丁度其時であつた。マベルは、綺麗な外出服を着て這入つて來た。
「まあ姉さん……此方に其麼恐ろしい事を仰有るものぢやありませんよ……眞誠なんか、此方の一番……不似合なのですもの……。れ……ゴオリング樣……出來る丈けお洒落を仰有いよ……。」と言つた。夫人は默した。ゴオリングは……
「然うですな……其方が非常に宜いのですが、此朝は一寸、何時のやうに行かないので……おう……そしてお暇を乞はなくちや……。」
「私の這入つて來るのを待つてあんな事を……。貴方は禮儀はないわ……。きつとお家のお仕付が惡かつたのですわ……。私が、お仕付をして上げれば好かつたに……」「貴女が、お仕付をして下さらなかつたのが殘念です……」

「だつて、もう遲いでせう……。それは然うと、貴方、明日の朝、車で被入るのですか……？」
「えゝ……十時に……きつと……それは然うと、奥樣……早朝のモオニングは、ポストには、お宅の來客の者は載つて居ません……よ。きつと州會とか會議とかいふものゝために、余地がなかつたのでしよう……。」と言つて亦思出して。
「れ……奥樣、私は、之れで失禮をいたしますが、貴女は先刻、私の言つた事を覺えていて下さい……れ……。」と意味ありげに、力をいれた。
「ですが、何故私に、其麼事を仰有るのですか……？私にはさんざ分り兼ねますわ……」と言つた。ゴオリングは、帽子と藤樣とを取上げた。そして「では私は、之れで失禮を……。マベルさん……さようなら……。」
と言つて暫く、マベルと話をして居たが、軈て出て行つた。
「姉さん……貴方からトミイに話をして下さいな……。」とマベルは夫人に、急はしく言つた。夫人は制するやうに、

「可愛想に……あのトミイさんは、何をしたと云ふのです。兄さんは、トミイさんの事を、今迄にない好い秘書だつて云つて被居るのに……。」

「否いえ……トミイは、私に厭な事を申込んだのです……亦…昨夜も音樂堂で、もう三人合唱があるといふ拔出しのならぬ時に、申込むのでせう。勿論、私は遣り返しなどが、少しもしなかつたのですが……だつて其麼事をすれば、音樂が、すぐ、止まるのですもの……。」と云つて亦。それからトミイが。今朝亦、眞晝中に、申込むのですわ。あの、アキレスの像の前でね。本統に、あんな美術品の前で起る出來事は、恐ろしいわね。巡査が干渉すると好いと思つてよう。それから中食の時になると、亦、あの人の眼の色が變になつて來たから、私、バイメタリストだと言つてやりましたのよ。私實は、此バイメタリスといふ意味が知らなかつたのですが、トミイは此云葉で、非常に面喰つて居るの——十分間もね……。大變……厭な顔をして……それに、私……トミイの申込みが癪に觸るのよ。丁度お醫者樣の樣な口振りで……丸つきり時世遲れなのですもの

それに內証話ですから厭な……一層大きな聲で言へば、それ程世間に反響を及ぼすから宜いのですがね……。私……トミイは好きだけど、あのローマンチックに成らうとする時が大嫌ひですわ。ね……姉さん……お願ですから、貴方からあの人に話して下さいな誰だつて一週間に、一度申込めば澤山ですもの……それも、相手の注意を引くやうな事をしなくちや駄目だ——と仰有つて下さいな」

「まあ… マベルさん……其麼事を云ふものぢやありません。兄さんは、あのトミイ樣の未來が、慥か貴いものだと言つて、非常に大切にして被居るのですからね……」

「私は……甚麼事があつたつて、未來なんか持つて居る男とは、結婚はしなくつてよ… 。」

「まあ……マベルさん……何といふ事を……」

「そうです共……姉さん……。貴女は未來のある人と結婚をなすつたでせう。爾うぢやなくつて？最も、兄さんが才物で、貴女は尊い……高い德を持つて被

居るからそれで宜いのよ。貴方は才物でも……それだから辛抱が出來るのですが、私なんか、我身に德なんといふものはありませんから、才物として我慢をして行けるのは、兄樣丈けですわ。で、私は才物とか言ふものは、迚も、自分の手におへぬものとして居ります。才のある人は、自分の事ばかりを考へて、此方の事を少しも考へてくれません……そして無暗と喋舌るものです此方の肝要な時には。いつも時分の肝心な方へ、心を集めて居ります……そりや惡るい癖を……持つて居てよ……」と言つて來て思出したやうに亦、

「あら……私……これから私ベジルドン夫人のお宅で、活人畫の稽古をしなくてはならないのだに、あつたり、忘れて居たわ……。何とかの勝利といつてれ……だが何とか……といふ事については、今では私…何の興味もなくつてよ…」

と言つて、夫人にキッスをして出て行つた。夫人は……哀れげな眼を屢叩きながら、その背姿を凝と眺めて居た。そして軈て吾に歸つて、吐と息を吐くのであつた。暫くすると、序廻に忙はしい跫音がした。かと思ふと、再び義妹

のマベルが走りつゝ這いつて來た。彼女は……息せき切つて

「ちよつと……姉さん……。誰か、貴女に、逢ひたいと言つて來てよ……。誰だと思つて……？あの大變な……チエベレイ夫人よ！そりやまあやつしてれ。貴女……お呼びなすつたの……？」と慌しく言つた。夫人は顏色を變へて立上つた。

本編は之れより益々佳境に入る處なれ共紙數の都合に依り茲に筆を擱め續編を『罪と愛』と題し別冊となしたれば本編と引續き御購讀の榮を賜はらんとを冀ふ。

理想の良人（終）

大正三年十一月廿五日印刷
大正三年十二月一日發行

△定價金拾錢▽
郵稅金貳錢

□傑作叢書（第三）□
理想の良人

共譯　中村梨村
　　久保田紫鏡

發行者　大阪市東區南久太郎町四丁目三十五番地　田村九兵衛

印刷者　大阪市西區阿波座中通二丁目四番地　荒木佐兵衛

發賣所　大阪市東區南久太郎町四丁目三十五番地　田村淵春堂
振替口座大阪一一三七五

賣捌所は全國各書籍店

傑作叢書

目次

■毎冊實價十錢　郵稅二錢■

▲本叢書ハ毎月數冊刊行▼
▲本叢書ハ内外文學ノ生粹ナリ▼

□第一編　トルストイ作　フエジヤ（生？死？）
□第二編　尚武會編　獨佛戰爭記（上）
□第三編　紀之海音作　近松門左衛門　心中物競
□第四編　モサロック作　ミランダー
□第五編　ドーテー作　ジャントフアンニー
□第六編　シエキンウ井ツチ作　死ノ底へ
□第七編　イプセン作　イレエネ（繭ならぬ繭）

278
69

□第八編　名作珍本滑稽淨瑠璃
□第九編　オスカーワイルド作警句集
□第十編　ゴリキー作呪ノ聲
□第十一編　オスカーワイルド作理想ノ良人
□第十二編　仝　作罪シキト愛人
□第十三編　ハヴトマン作寂々學子
□第十四編　ニイチエ作哲人ノ
□第十五編　シユミツトボン作街
□第十六編　チエホフ作犬
□第十七編　ゾラ作女優
□第十八編　尚武會編獨佛戰爭（下）
□第十九編　イブセン作人民ノ敵
□第二十編　ストリントベルヒ作犧牲

〈以後續々逐次刊行〉

終